

# 第1回土生町史跡探訪講座



平成23年6月28日  
土生公民館

# 土生町史跡探訪講座

土生公民館

H23.6.28

この講座の資料は、森本 繁著 浪速社 瀬戸内しまなみ海道「歴史と文学の旅」・因島文化財協会の「因島史跡散歩」「土生村風土記」を参照させていただきました。ありがとうございました。

## 1. 鯖大師・弘法大師について

鯖大師・弘法大師は、以前長崎棧橋を上がって左に曲がってすぐ前にありましたが、今は、因島公園の「ホテル インノシマ」の前にあります。

### 伝言免

いつ頃の話しか、暑い夏のある日、威勢良く魚を担いだ魚屋が長崎の浜辺を通りかかると、向こうから汗と埃に汚れたみすぼらしいひとりの僧がとぼとぼと来て「ワシは空腹でもう歩くことができません。すまぬがその魚を一匹分けてくださらぬか。」と小さな声をふりしぼって呼び止めました。

見ればきたない僧なので「この中の魚は腐って食べられないものです。」と魚屋は嘘を言って魚をやらずに走るように逃げました。さて、次の家で魚屋が魚を売ろうと魚箱のフタをとると中の鯖はみな腐ってウジがわいていました。驚いた魚屋は僧に謝るために急いで引き返したがもうその姿は見あたらなかったそうです。また、その腐った鯖を海に放すと、泳いでいったそうです。

この鯖大師・弘法大師の銅像はその伝説に心をよせられたものか、大正10年5月に土生町の村井才吉氏が、たくさんの私財をもって自分の屋敷内へ一人で建てられものです。重さ30トン、境内には四国八十八箇所の石仏が祀られています。

毎年、春先因島の島四国を巡拝する遠き近きからの善男善女も、この鯖大師・大きな弘法大師の像を眺めて驚嘆の声を放ち、村井氏の遺徳が偲ばれています。

なお、この像は初め、この村井さんの屋敷に南向きに建てられていましたが、昭和33年3月に道路拡充のため、因島病院の前に移転し、その後、因島公園の「ホテル インノシマ」の前に移転しました。



十月に安永村井戸を掘り、  
 市の發展と四島市民の御加護を願つて昭和五十二年五月  
 富高古に移転されたものである  
 あふられしゆきまかしのころといふ  
 われは大師と二人づれなり  
**鯖大師の由来**  
 弘法大師因みに御米島の秋島を一巡されるお次女曰  
 お粟波朽ち求破れるを食相りし儀に修行道であつたと  
 いう海舟と此道筋の途中頭に魚桶を乗せ行商する魚屋  
 にお逢ひをり魚の香拾ふ示められた其の時魚屋曰之曰  
 商中の魚は死なして賣るはよく金く果れた生貝坊主乞  
 合の土を賣る去たといふいれり行つて魚屋が小と桶の  
 中を見ると今朝のたけのこも鯖も鯛も全部腐つたこれ  
 ぢう大師は魚屋を憐れみ桶の中へ鯖の地を振り出し  
 加加持と云ふに及すに及すに内法へ泳ぎ去りしに  
 今に鯖のつれあり  
 この鯖大師像は明治四十二年に作られ村井戸を言て定地に  
 奉遷せられたり大師像と云ふに當處に杉敷といふあり  
 西園寺沙門文雄



## 2. 因島公園の展望台周辺の史跡

### (1) 石土蔵王大権現

祠が因島公園の展望台の下にあります。いわれは、特に分かりませんがいつもきれいに清掃されています。



案内板：展望台下の駐車場



### (2) 展望台の周辺

展望台からの土生町の景色です



天狗山の南斜面に「つれしおの石ぶみ」  
 「万葉の歌碑」「小林一茶」「川口松太郎」「志賀直哉」  
 「司馬遼太郎」「今東光」「若山牧水」「松浦英文」  
 「高見順」「河東碧梧桐」「林芙美子」「鴻雪舟」  
 「三好達治」「半田道広」「本因坊秀策」「村上元三」  
 「吉井勇」「火野葦平」「高田好胤」の歌碑があります。



(3) 展望台の駐車場に付近



「弥功の碑」春潮や 倭寇の子孫 汝と我

(4) 因島第3公園周辺



水軍の武将と城山三郎の歌碑です





(5) 「ホテル インノシマ」前・周辺



坂村真民【念ずれば花ひらく】の歌碑です

(6) 因島第3公園より第2公園の間「大岩大神」



(7) 因島公園登り口



林芙美子の歌



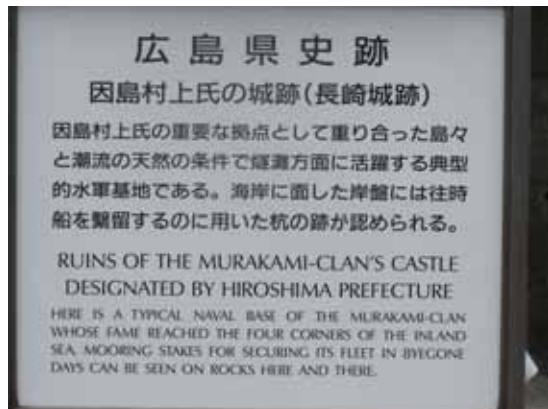
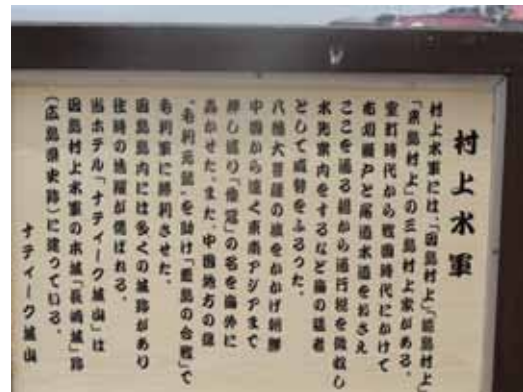
### 3. 長崎城跡について

長崎山は、現在ナティーク城山が建っており、日立の正門に向かって右の石段を登るようになっていいます。昔は、本丸・二の丸があって、本丸から南西に三段の郭(くるわ)がのびて船隠しになっていました。先端に係船用の杭穴(くいあな)がありましたが、造船所の護岸整備のため見えにくくなっています。

天授三年(1377年)に、村上師清が来て統一すると二男の次郎吉豊に因島本主家を継がして長崎山を居城としました。爾来(じらい・それからのち)180年間因島村上水軍の本城でありました。

山上南側に城山神社が祀(まつ)っており、祭神は大三島大山祇神社のご分霊を勧請(かんじょう)し大山積大明神というそうです。昔から祀ってありましたが、明治44年、荒神山に移し、降って昭和41年11月、元の城山に迎えましたが、ホテルを建てるため、移転し現在日立正門から中に入った左側に祀られているそうです。

また平山画伯がスケッチした場所がホテルのベランダにあります。ホテルからの夕焼けが絶景です。



ホテルの下にあります

## 4. 荒神社について

この地は昔長崎城の控えの城跡で本丸，二の丸，三の丸を構えていたと思われませんが，神社は境内地や畑地化して旧状ははっきりしていません。村上水軍当時は，長崎山と荒神山とは続いていたものです。荒神とは三宝荒神の一つであって，荒れる神として言います。祭神は須佐之男命であって，沼名前神社の分霊を勧請していましたが，安永4年(1775年)拜殿修築し，寛永4年，明治34年に，本殿拜殿等改築したそうです。併設社は城山神社，大山祇大神等お祀りしてあります。又，境内には金の神なども祀られていましたが，この神は地の神と同じで，たたり神とも言い，信仰が非常に難しいので，一般には信仰するものが少ないそうです。主に修験道が信仰する程度だそうです。



## 5. 大宝寺について

この付近は，かつて長崎城，荒神山城の館のあった所で，水軍関係者の供養塔と思われる一石五輪塔が点在していました。五輪塔は，明治時代には現在ナティーク城山の付近にあったものだそうです。大宝寺の前の和尚さんが，現在のお墓の方へ集められ供養されているそうです。

又，大宝寺には墓城整備の時出土したという室町期の法篋印塔の残欠が祀ってあるそうです。この寺は菅生山大宝寺と言い，真言宗醍醐寺派，土生高野山，第44番霊場大正5年山本隆英開基本尊弘法大師昭和26年高野山派から醍醐寺派に変わったそうです。

また，鯖大師が因島病院前にあった時の金撞堂が大宝寺に移築されています。鐘は大宝寺さんが設置された鐘ですが，木材は，その当時のままの貴重な木材です。





水軍関係者の供養塔



因島病院前にあった鯖大師の金撞堂

## 6. 石鎚神社(聖天様)について

大聖歡喜天，略して歡喜天と言います。仏教の守護神の一つで障碍（しょうがい）を除いて富貴を得るために祀られたもので，ヒンズー教のガルシヤが仏教に取り入れたもので，大自在天の子，韋駄天（いだてん）の兄弟とされています。男神と女神との抱擁像で表現されているところから，夫婦和合や子授けの神として信仰されるそうです。



## 7. 最上稲荷分室について

岡山市高松稲荷にある最上稲荷より，土生町の長崎下区の人が勧進元で建てられたものだそうです。稲荷とは稲成りであって仏の姿は左肩に稲束をかつぎ，右手に鎌をにぎったその姿は，農業（労働）の守護ということから商売繁盛のお守り御利益があるとされています。



## 8. 岩屋寺について

以前、横の山から巨石が札所に落ちて倒壊しました。一時ご本尊は下の聖典様に預けられそうですが、現在はお堂も再建され立派になっています。お堂の左には弘法大師像と不動明王座像の大磨崖仏があります。明治45年村井才吉氏の寄進で、ホテル インノシマの鯖大師や弘法大師の銅像も村井才吉氏が自費で建てたものだそうです。



岩屋寺大磨崖仏です



## 9. 九笹大竜王について

昔は京都の伏見稻荷から勧請してお祀りしていましたが、現在九笹八大竜王として祀られています。この入り口左側に一石五輪塔が、三体あります。水軍当時から室町時代の物であろうと思われませんが、何れにしても古い時代の供養塔であります。ここも稲荷さんであります。登ってみると大明神とか、色々な神の名前が21～22程お祀りしてあり、どなたかが、お世話をしてくださっているのかわかりませんが、いつもきれいに行き届いていて、気持ちの良いお宮です。



水軍戦死者の墓と言われています







## 10. 因島八十八ヶ所結願所高野山

旧公園登り口の所に因島八十八所を，お詣（まい）りが終わったらこの結願所へ詣（もう）でれば，和歌山の高野山に詣らなくてもよいとされています。境内には水子地蔵も作られて供養されているそうです。ここにも村井才吉氏の寄進されたものが，多く残されています。又，付近には千手観音磨崖仏・和右工門など，五重の塔の下の巨石に刻まれています。



蛙に似た岩の磨崖仏



## 11. 夫婦松について 伝説

夫婦松の前には金之神という碑がありました。今はよく分かりません。これは、地の神と同一であり方位神とも言われています。この神には天と地の神の二つがあって、天の神は災いは少ないが、地の神は恐ろしく災いが大きく、この神の方位決定には時と所と人によって異なり、事実上、素人は難しく陰陽師修験者でも困難であるそうです。即ち、金神地神七殺、金神遊行、金神間日等と言われています。その方位を犯せば同族七人にも累が及び、46時中巡回する日と、休む間日が暦法と関係するし、当人の干支や星にもかかるといわれています。だから信仰する者が少なく、又信仰の仕方が難しいそうです。この難しい信仰を一手に引き受けているのが江戸時代後期の総本山として活動を始めた、岡山県浅口郡金光町にある「金光教」だそうです。屋敷神といわれています。

蛙に似た岩

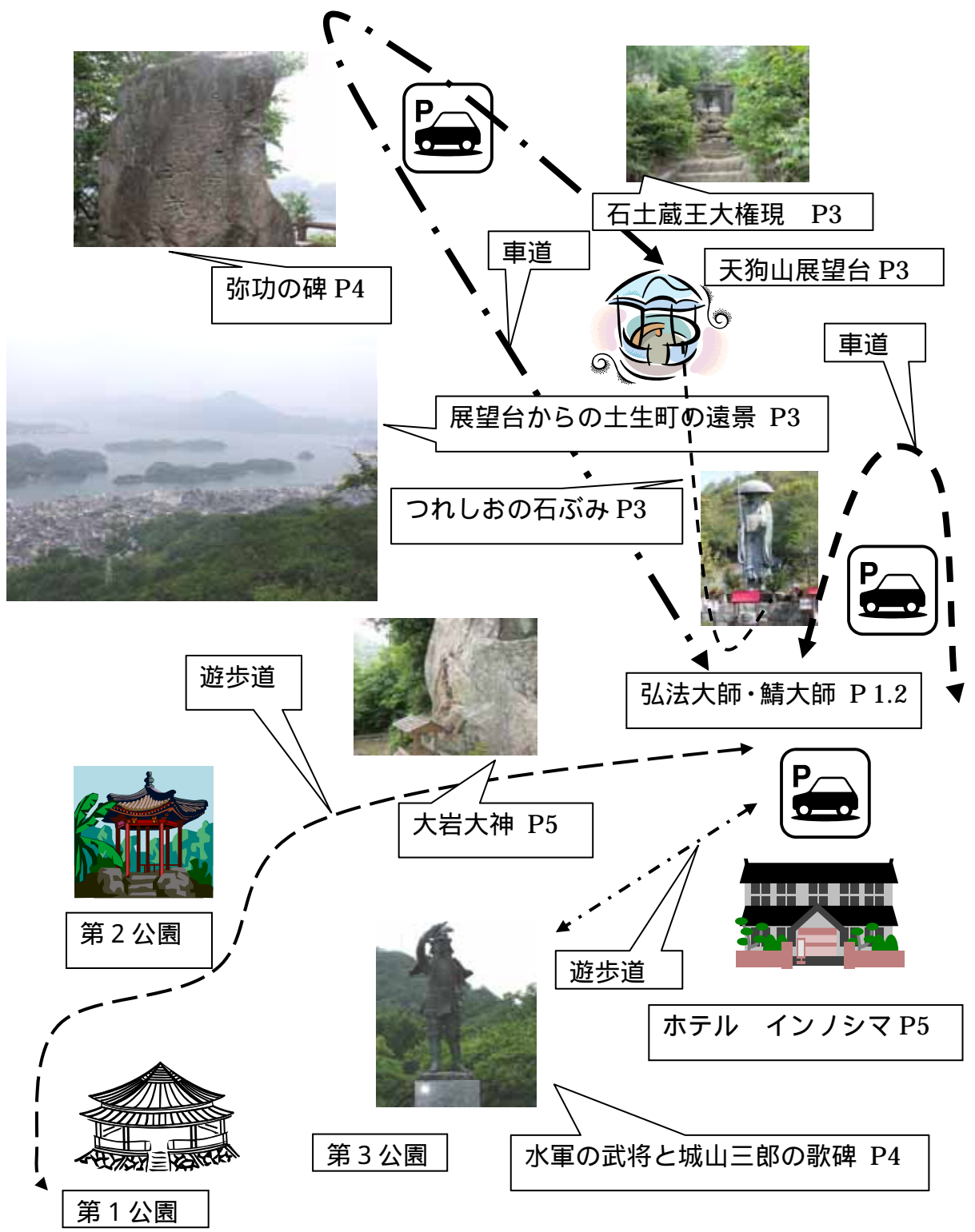


枯れた夫婦松だと思われます



昔、村上水軍五代の総帥村上備中守吉安がルソンから一人の若者を連れて帰ってきた。ところが時の家老の宮地大炊助明光の姫と恋仲となり、明光は怒って若者を斬った。姫は悲しみ自害して果てた。明光は、姫の心根を哀れみ雄松・雌松を植え二人の菩提を弔った。これがいつの間にか根がからみ合い育ったのがこの夫婦松で後世縁結びの神として信仰を集めていましたが、枯死したので伐採され根本だけが残っていて、昔を物語っています。

# 天狗山から弘法大師・鯖大師へ



# 第一公園から長崎城

